

云は、波万具理の類の介蟲カヒどもの惣名にて、右の三漢名は、彼國にて心々に混マカつて、詳には分らざむし、右のまいに定、右の三の和名の中に、宇牟岐ウムギ蛤カキの古名なる、○註、字鏡にも、蚶カキ螺カキなどの字を、いづれも宇牟岐ウムギと記して、餘の二名は凡て見えす、後に其中にて、小きを濱栗ハマクリとつけ、大なるを本のまいに呼び、文あるを板屋具イタヤガヒとぞつけ、む板屋具イタヤガヒとは、其文の板屋根の茸目シロメに似たる故の名なるべし、さて又後にはつひに宇牟岐ウムギてふ名は亡て、大小凡て波万具理と云なりけり、○出雲風土記に、神魂命御子宇武賀比賣命と云見ゆ、○註、さて右の二比賣は即蚶貝カキと蛤貝カキとを云なり、ざるを比賣と云るは、雉トビを鳴女ナメメと云、魚名にも、赤女、口女、鯛女など、皆女の定に云る、凡ての例ともすべけれど、此はたゞ女と云ずして、比賣と云るは、今の功を美稱て神とせる名なり、

〔日本書紀景七行〕五十三年八月丁卯朔、天皇中幸伊勢、轉入東海、十月至上總國、從海路渡淡水門、是時聞覺賀鳥之聲、欲見其鳥形、尋而出海中、仍得白蛤、於是膳臣遠祖名磐鹿六雁、以蒲爲手繩、白蛤爲膾而進之、略下

〔本朝月令六月〕朔日、内膳司供忌火御飯事

高橋氏文云、中天皇景五十三行、中行幸於葛飾野、令御獵矣、大后八坂媛波借宮爾御坐、磐鹿

六鴛命亦留侍、此時太后詔磐鹿六鴛命、此浦聞異鳥之音、其鳴駕我久久、欲見其形、即磐鹿六鴛命乘

船到于鳥許、鳥驚飛於他浦、猶雖追行、遂不得捕、略中、船遇潮涸、渚上爾居、奴、堀出止、爲爾、得八尺白

蛤一具、磐鹿六鴛命捧件二種之物、獻於太后、即太后譽給、比悅給、氏詔、久、甚味清造、欲供御食、爾時磐

鹿六鴛命申、久六鴛令料理、天將供奉、止白、天遣喚無邪志國造上祖大多毛比、知々夫國造上祖天、上

腹、天下腹人等爲膾及煮燒雜造盛、天見河西山柅葉、天高次八枚、爾刺作、見真木葉、天枚次八枚、爾刺

作、天取日影、氏爲纒、以蒲葉、天美頭良、平卷、探麻佐氣葛、天多須岐、爾加氣、爲帶、足纏、平結、天供御雜物

乎、天結飾、天乘輿從御、還御入坐時、爾爲供奉、此時勅、久誰造所進物、問給、爾時太后奏、此者磐鹿六鴛